
ジノの彩国建国物語

餅国

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジノの彩国建国物語

【Nコード】

N3179Y

【作者名】

餅国

【あらすじ】

突如として《緑国》は《青国》の軍勢に攻め込まれた。両国の兵力の差は大きく、次々に集落は落とされていく。《緑国》は劣勢の状態にあった。《緑国》の一兵士であったジノは、その動乱の中でなぜかその身を立てていくことになる。しかし、当の本人は出世することを望んでいるわけではなかった。むしろ嫌がってすらいるようであった。

一話

晴れ渡る秋空の下に広がっているのは、どこまでも無残な光景であつた。その集落のそこかしこから、ぶすぶすと黒い煙が上がっている。ほとんどの建物は兵によつて火を付けられるか、もしくは打ち壊されていた。今ではまともな建物など一つも残っていない。そしてその周囲には、逃げ遅れたのであろう多くの遺体が残されていた。

遺体の中には、あきらかに斬りつけられたのだと分かる形で倒れている者もいれば、傍目からは無傷のようにしか見えない者もいた。ただし、その者らも一人の例外なく死んでいる。

なぜなら、略奪が終わつて一日が経つた今、この周辺に兵の姿はない。彼らの中にもし生きている者がいたのなら、とくに逃げ出しておかしくないのだ。それでもまだそこに留まっているというのは、つまりそういうことだつた。

それでも一応、まだ彼らは人としての体裁を整えていた。とはいえ、彼らを埋葬しようとする者はいないから、それも時間の問題ではあるのだが。

中には火に巻き込まれたらしく、体の大部分が焼けて黒く変色している者の姿もあつた。彼らに関しては、すでに人としての面影が残っていない。ただただひどい臭気を放っている。もし意識のあつたまま焼かれたのだとしたら、彼らは事切れるまでひどく苦しんだことだろう。

その時のことを考えると、この地はまさに焦土と呼ぶに相応しい、この世の地獄のような場所であった。

男はそんな街並みを憂うような表情で眺めていた。それはまるで自分を責めているような、自分の無力さを悔やんでいるような表情であった。彼はこのような事態を引き起こした責任の一端を担っている。勢いのついた兵の暴走を彼は抑えることが出来なかった。

彼以外の指揮官は、略奪を兵の権利として認めていた。それらを兵に与えても彼らの懐は全く痛まないからだった。むしろ士気向上の手段として最も有効である、と言い切る指揮官もいるほどののだ。しかし、彼にはどうしてもそのことが受け入れられなかった。その振る舞いが人間としての尊厳を全く捨て去っているようにしか思えないからだった。

そんな彼に後ろから近づき、話しかける人物がいた。彼直属の副官だった。

「メール様。時間です。そろそろここを出立しませんと」

その言葉に、メールこと彼は小さく頷いた。確かに、いつまでもここで感傷に浸っているわけにもいかない。戦争はまだ続いていた。

「兵の様子はどうか？」

メールは副官に尋ねた。

「ええ。兵の士気は依然下がっておりません。むしろ高まっているでしょう」

副官は端的に事実だけを告げた。その理由に関しては、明らかにしない。彼はメールがなぜここに立って街並みを眺めていたか、分かっていた。

「そうか」

メールもただそう答えた。こちら余計な言葉は言わない。副官とは長い付き合いであるので、彼の考えていることは分かっている。早くこの戦争を終わらせよう。メールは眺めていた光景に背を向けると、足早に歩き出すのだった。

《青国》が《緑国》に攻め込んでから二週間が過ぎようとしていた。《青国》のそれはまさに電光石火と言っていいような素早い進撃だった。《緑国》はほとんど抵抗らしい抵抗も出来ず、その領土の三分の一を《青国》に食い荒らされている。

すでに《緑国》内では、厭戦の雰囲気さえ広がっているようであった。まずもって両国の兵数が違うのだ。《青国》の兵数は一万五千を超えていた。その軍勢は三派に別れ、それぞれが王都に向かって突き進んでいる。

一方で《緑国》は、さんざんかき集めても兵の数が一万三千しか揃わないのだった。しかもその内の半分は、総反攻のためという名目で王都周辺に集められている。つまり各地に残された兵は六千あ

まり。そして、それを敵の侵攻に合わせて三つに分けなければいけない。単純計算で、《青国》の約半分にも満たない兵数で《緑国》は戦わねばならないのだ。敗戦を重ねるのも無理はない。

しかしだからと言って、《緑国》は各地の抵抗を諦めるわけにもいかなかった。《青国》が攻め落とした集落で略奪を行なっていることが分かったからだ。なんとか逃げ出してきた者の話によると、集落ではどこまでも暴虐な振る舞いが行なわれているという。

それゆえ、少しでも住民が逃げる時間を稼ごうと、《緑国》の軍隊はじりじりと撤退するような悪戦を続けていた。

また《緑国》はその名前が示しているように、とても自然の豊かな土地であった。なんとその領土のうち、半分以上が山林で占められているのだ。それら一つ一つの山々はあまり大きくはないのだが、いくつも連なっている。

それゆえ《緑国》において、人が有効活用できる土地というのは限られており、同程度の大きさの領土を持つ《赤国》あかのくにや《黄国》きのくにに比べてもその国力は低いものだった。

しかし一方で、その山林が天然の防壁となっている事実もあり、守備に回る《緑国》軍にとっては具合が良かった。ある程度兵数がいっても、山の中に伏せていれば敵に気づかれることは少ない。また大勢の兵が通れるような大きな道も数が決まってくるので、待ち伏せがしやすいという利点もある。

多分に漏れず、ジノが率いる第三小隊も小さな山の麓近くに陣取っていた。一応の彼らの目的は斥候であったが、今のところ彼らの

周辺に変わったことはなかった。小隊の隊長（正式には副隊長という役職）であるジノは、副官と現在の状況について話し合っていた。

マキシムと話していると、後ろから人の寄ってくる気配がした。それもそこらに落ちている木の枝を気にすることなく踏んで音を立てているので、おそらく自分の部隊の者ではない。敵、のわけはないだろうから、おそらく本隊からの伝令だろう。

「ジノ副隊長殿ですか？」

声をかけられてから、後ろを振り向いた。そこにいたのはまだ兵になって間もないような、ずいぶん若い兵だった。

「そうだが」

俺がそう答えると、その兵は安心したような顔つきになって言った。

「隊長殿が副隊長をお呼びです。すぐに来るようにとのことでした」「わかった。すぐに向かう」

俺は伝令にもう一度頷くと、副官のマキシムの方に向き直った。

「すまないが、ここを頼む。聞いたとおり、隊長殿が呼んでいらっしゃる」「

わかりました。何かあればすぐ知らせるようにします」

俺はもう一度頼むと言って、ここから少し離れたところに待機し

ている歩兵隊の主力の元へと小走りで向かった。できれば面倒な事でなければいいのだが。

《緑国》第二軍、第二步兵隊の第三副隊長。それが俺の今の役職だった。具体的には、五十人程度の兵をまとめる役目。第二步兵隊の総数は約五百であり、それは本隊と八つの小隊に分かれている。その内の小隊の一つを俺は預っていた。そして正直に言えばこの役職は、俺の手に余っている。

もともと、俺はそこら辺にいるただの一兵卒に過ぎなかった。きちんとした将校の教育も受けていない。まして人に指図するなど、到底俺には向いていないように思われた。そんな俺がこのような立場になったのは、やはりこの戦争が起きたからであつた。

二週間前、突如として《青国》は《緑国》に攻め込んできた。いやもしかしたら宣戦布告の宣言はされていたのかもしれないが、俺たち下っ端は知らなかったのだからあまり意味はない。そして国境付近の防衛勢力として存在していた俺たち第二軍は、一番最初に《青国》の軍勢と対峙した。

結果は知つての通り、こちらの惨敗である。たつた一度のぶつかり合いで俺たち第二軍はさんざんに打ち破られた。

もともと第二軍は総勢三千人程度の兵数があつたのだが、その戦いのあと、兵の数は二千五百を切るまでに減少していた。一度の戦闘で消耗する兵の数は五十に満たないというのが通説であるので、この戦いでは実に通常の十倍ほどの損害を受けたことになる。聞いた話によると、《青国》の損害はほぼ皆無と言っていていいそうだ。よ

ほど兵の力量に差があるようだと、その時俺は思った。

俺の所属している第二軍・第二歩兵隊は不幸なことにその最前線に陣取っていたため、ほかよりも大きな被害を受けていた。俺が所属する隊を率いていた副隊長は戦死。またその後を継ぐべき副官もひどい怪我を負っており、前線に立って指揮を取れる状況ではなかった。そこでお鉢が回ってきたのが俺である。

俺は撤退時、自分が死なないよう必死に戦っていたけど、その姿が偶然歩兵隊の隊長の目に止まったらしかった。第二歩兵隊を再編成する際、隊長の鶴の一声で俺の副隊長就任は決まった。もちろん教育も受けていない俺をその役目につかせることに反対意見はあったのだが、隊長は無理やり押し切った。ほかに適正のある人物がいないという消極的な理由がその根拠であった。そのような状況であったため、俺が断ることなどできるはずもなく、嫌々ながら俺は副隊長の役目を引き受けた。

よく知らない者が見れば、隊長は俺を出世させた恩人というように映るらしい。そして実際、その当人が俺に恩を着せていた。お前を引き上げてやったのは俺だぞ、という思いが彼の言動の端々に感じられるのだ。ただ、こちらとしては出世など願い下げなことなのである。

さつきも言ったように俺は人に指図することなど向いていないのだ。誰かの指示に従う時こそ、自分の力を最大限発揮できるように思う。人にはそれぞれ合った役割分担があるのだ。

さらには人間関係の問題もあった。つい先日まで立場の同じだった同僚が、突然自分の上司になったらどう思うか。それこそ嫉妬されるくらいならまだいい。問題はこちらの力量を甘く見て、命令に

従わない奴が出てくるということなのだ。

いや、実際俺に能力があるかといえば確かに疑問符は付くのだが、かといって命令違反の多発する小隊が力を発揮できるはずもない。だからこそ上官は専門の教育を受けた者になることになっている。

事実として、俺が副隊長に就任してから接してくる態度を明らかに悪い方に変えた奴が何人かいた。すなわち、内心不満に思っている奴はもつというところだろう。まったく、全てが面倒であった。今現在、いくらか信頼できるのは昔から俺と仲のよかった後輩のマキシムくらいだ。

本隊は第三小隊の隣の山の麓に待機していた。その隊長は民間から接收した比較的大きな山小屋の中に本部を置いている。

小屋の中に入ると、すでに俺以外の副隊長は全員椅子に座っていた。どうやら俺が一番最後に到着したようだ。俺はいかにも急いで来たというふうに装い、用意されていた椅子に座った。それを確認して、隊長は声をあげる。

「全員揃ったようだな」

その言葉に皆の視線が一斉に隊長へと注がれた。改めて見ると、隊長はこの戦争が始まってからずいぶん痩せたようだった。

「集まってもらったのはほかでもない。ちょうど今さっき、出していた斥候から新しい情報が入った。どうやら敵はここから二日の位置にいるようだ」

そう言って、一度言葉を切った。

「このままの進軍速度だと、四日後にまた新しい集落が略奪される。そして今度の集落は人口が二千人程度と、ある程度規模があるため避難が上手く進んでいない。後方からの報告では、住民が安全な場所に逃げこむまで一週間は見て欲しいそうだ。……つまり、俺たちはまた時間稼ぎをしないといけない」

その隊長の言葉にどこからともなく呻きが漏れた。いやもしかしたら、俺が呻きを漏らしていたのかもしれない。

「もちろんその集落を見捨てるつもりであれば、こちらは無理に敵軍と戦う必要もない。しかし、そんなことができるはずがないだろう？　俺たちが守るべきものは国の民以外にはないのだ。そうだな、諸君？」

追隨する者はいなかった。隊長はそれを無言の肯定と捉えたらしい。一度頷く。

「俺たちの力でどうにか敵軍の足止めをしないといけない。これは避けられないことだ。……うん。我が軍の置かれた状況は以上だ。それでは今からこの状況に対応するための行動について、私の構想を述べる。説明は副官に任せる」

隊長がそう言うと、横に控えていた隊長の副官が立ち上がった。

「本構想の目的は、後方にある集落の住民の退避を援護することにある。そのため、必要最大限の期間我々は敵軍に攻撃を加え、その足止めを図る。また同時に、こちらの損害を最低限に抑えるための

手段を講じる」

その一言で、副官がこれから何を言おうとしているのか俺には分かった。というより、今までしてきたことと何も変わらないのだった。“伏兵による奇襲”である。またいつ眠ればいいのか分からないような生活がやってくるようだ。

俺は誰にも気付かれないよう小さく、またため息を付いた。

一話（後書き）

拙い小説ですがよろしく願います。目標は、某守護者のような格好の良い文章です。

12 / 4 かなり修正しました

二話

帰ってきた副隊長の表情はよくなかった。それから判断すると、どうやらまたろくでもないことを任されたらしい。全くついていないものだ。内心そんなことを思いながら、俺は副隊長のもとへと近付いて行った。

「こちらは何も変わったことはありません」
「わかった。マキシム、ご苦労だった」

俺が報告を終えると、副隊長は懷から地図を取り出して広げた。それはいくらか土にまみれており、ちらほら破れも見える。よく使われていたのも当然だった。戦闘では、こちらの位置取りに自分たちの命がかかっているのだ。

その地図の至る所には書き込みがなされていた。副隊長はその内の、ある一箇所を俺に指し示す。今いる位置からは半日分ほど離れた、これまた山の麓辺りであった。それが次の目的地らしい。

「今からここに向かう。すぐに部隊の手筈を整えてくれ」

俺は頷き、尋ねた。

「伏兵ですか？」

「そうだ。俺たちは敵の真正面に配置された。——なんとも名誉なこと」

付け加えた部分に関しては、少し感情がこもっていた。俺は少し

表情を崩した。

「副隊長殿はひどく信頼されてますからね」

こちらの冗談にかすかに副隊長は笑った。

「俺を引き上げたのは隊長殿だからな。使い勝手のいい駒だと思ってるんだろっ」

副隊長はわざとらしく、大きく息を吐く。

「いや、まあ、なんとも。ついてないですね」

まるで人ごとのように言う俺に副隊長はまた笑った。

「うん。確かについてないな。俺も、それに巻き込まれたお前も」

それはどこか、諦めの混じった表情であつた。それから彼は一瞬だけ口を歪め、俺の気を引き締めるように命令を告げる。

「余計な話はこれくらいにしよう。敵軍はここから二日の位置にいる。ぶつかるのはおそらく明日の夜だ。どれくらい相手のやる気を削ぐことができるか、やれるだけやってみよう」

俺はその言葉に頷き、部隊の手筈を整えるため副隊長の前から離れた。

二週間前、俺は命を落とす寸前のところをジノ副隊長に助けられ

た。あの国境からの撤退戦のことだ。

その時すでに戦場の混乱は極まっております、《みどりのかくに緑国》の兵士は持っている武器を放り出して、ただひたすら逃げるような状態であった。第二步兵隊で言えば、副隊長がその時すでに戦死していたということもある。代わりに指揮をとれる者がその場におらず、当然敵軍の追撃に対してもささいな抵抗すらできない。こちらの損害はますます増えていった。むしろあの時の戦いの損害は、その多くが追撃戦でやられたはずである。

その時俺は、まだ武器を手放すところまでは落ちていなかった。しかしやはり周囲の慌しい様子にうまく頭は働いていない。ただ逃げるだけでは死ぬ、そんな意識だけはあったのだが、行動に移せてはいなかった。皆と同じく後方へとただ逃げるだけであり、そんな俺たちの寸前まで敵の追撃部隊は迫っていた。

そんな時、大きな声を上げたのが副隊長であった。彼はまだ戦う意志のあった者たちをまとめ、伏兵を置くようにして道の端に小さく固まらせた。俺はその一員として加わった。そして、俺たちは調子に乗って突出してきた敵軍の小さな部隊に痛撃を与えてその足を鈍らせ、それからやっと秩序だった撤退を始めることができた。すなわち、俺が今生きていられるのは副隊長のおかげといっても過言ではない。

とはいえ、なぜその時皆が彼の言葉に従ったのかはわからない。普通に考えれば、当時ほんの一兵卒でしかなかった彼の言葉を信じても生き残れるようには思えないはずなのだ。しかし皆は従った。俺もだった。それは単に藁をも掴むような気持ちだったのかもしれないが、それで俺たちは生き残ることができた。

だからこそ俺は、先輩が副隊長に任命された時、その副官に立候補した。もともと仲良くさせてもらっていたということもあり、それは問題なく受け入れられた。とりあえず今のところ、この判断が間違っていたとは思っていない。ただなんとなくこの先輩の近くにいれば、この負け戦でも生き残れるんじゃないかという思いが俺の頭にはあった。

俺は部隊が待機していた場所まで移動すると、大声で移動すると告げた。思い思いに休んでいた連中は、それを聞いてのそのそと立ち上がる。その様子はどう見ても士気の高い部隊とは思えなかった。それも仕方のないことではあるのだが。

命からがら国境での戦から逃げ出してきた、今度は息をつかせぬまま各集落の防衛戦だ。それも時間稼ぎをするだけという、神経を削る戦である。いくら小競り合いとはいえ、また犠牲を出さないような戦い方をしているとはいえ、明るい話題もなく、少しずつ部隊の仲間が脱落していく現状は辛い。

さらに言えば、この部隊は撤退時の損害が大きかったため、周囲の部隊から兵の融通を受けていた。結果として、部隊の三分の一は寄せ集めの兵士であり、統制だった連携などとれない。

それに周囲の部隊だって、使える兵は自分の隊に残しておきたいのだ。もちろん各自が生き残るためである。そのため、融通される兵自体の練度はさほど高くない。ましてこの部隊の副隊長はついこの前昇進したばかりの、きちんとした教育も受けていない人物なのだ。

あの時の撤退戦の場にいた者は違っただろうが（もちろんその中にもいまだ副隊長の力量を疑っているものもいるが）、それほど体格も良くない副隊長のことを見くびっている兵は多かった。

こんな部隊で思うような戦いなどできるはずがない、という思いはもちろん俺にもある。しかし現実はどうしようもなかった。この部隊でどうにかこの先をやりくりするしかない。せめてものこと、俺は副官としていくらか迫力を出すことにした。

「お前ら、急げ！ はやくしろ！ 半時間後にはここを出発するぞ！」

必死で張り上げた俺の声も、彼らの反応を早くするにはまだ足りないようであった。

《青国》第三軍の先鋒は、現在第五・六歩兵隊が務めていた。その総数は千五百。全体的に意気軒昂である。それも当然であった。四日後にまた新しい集落に攻めこむことを知っている兵たちは、まるで目の前に餌をぶら下げられた馬のようである。

今度の集落はかなり大規模である、ということは兵の誰もが知っていた。であれば、攻め込んだ際の抵抗もそれなりのものがあるだろうと容易に予想できるのだが、数を考えれば、どんな抵抗も彼らにとってはただの時間稼ぎにしか過ぎないのだった。

むしろ大事なのは、集落を攻め落としたその後だ。今度の集落は、

彼らがこれまで落としてきた集落以上に大きな旨みがあるはずだった。先陣を切って集落に攻め入りたい、と兵の誰もが考えている。

つい先日彼らが落とした集落は規模が小さいものだったので、最初の方に入った部隊がその美味しいところを全て持ち去ってしまった。後ろに順番が回ってきた頃には集落の中には金目の物などほとんどなく、もちろん女などはその姿形すらない。その集落にはただただ燃えた建物と、遺体だけが残されていた。そんな状況に一部の兵たちは、かなり不満を貯めているようだった。

「なあおい」

あることを思いついた俺は、ぶらぶらと隣を歩いている同僚のリットに声をかけた。

「ん？ どうした」

「いや暇なんだよ。しかしさあ、この前の集落ひどかったよな」

それでリットも、俺が何を話したいかわかったようだった。

「ああ、しけたもんだったな。女は一人残っちゃいねえし、金になるもんもねえ。焼け残った家に入ってみたら、本当に《・・・》なんにもなかったな。畑の作物も全部抜かれてたし。床の裏に隠してあった麦を見つけたんだが、それも食料班に取り上げられちゃった」

命を張ってんだからせめてものご褒美くらいは欲しいよな、とリットは言った。俺は少し声を小さくして、続ける。

「だからよ、今度は俺達も先鋒に加わらねえか？」

俺が考えていることにリットは興味を持ったようだった。

「どういうことだ？」

「だからな、集落は攻め込んだ時の順番に略奪ができるだろう？」

リットが頷く。

「だが、俺たちがいる第五歩兵隊はいつも攻めこむのが遅い。だから周囲に美味いところ持ってかれてるんだ」

「ん、まあ、俺たちはもしもの時のために退路を確保する役割だろう？ だから仕方ねえっちゃあ仕方ねえが」

「どこにその“もしも”の場合があるっていうんだよ。実際、今まで周囲の連中が暴れてるのを俺たちは物欲しそうにただ見てただけだろうが」

そう言つと、リットは少し考えるような表情になった。

「だからな。今度は俺たちも先陣に加わるんだ」

俺は続ける。

「独断で俺たちが突っ込むんだよ。ある程度揃った数で行けば、多分周囲の奴らもついてくる。いい加減不満が溜まっている奴は多いからな。ぐちゃぐちゃになっちまえば誰が誰だかわかんねえし、どうせ勝ってる戦なんだ。処罰を受けることもないだろうさ」

俺がにやりと笑うと、リットは少し迷ったようだった。しかし、最後は俺につられるように笑った。とりあえずこれで賛同者が一人

確保できた。さらに数を増やさないといけない。

俺はリットに話を広げるよう頼むと彼から離れ、また別に賛同してくれそうな同僚を探した。

二話（後書き）

で視点が変わります。

12 / 4 かなり修正しました。

三話

当初の予定通り、第二歩兵隊の各小隊は指定された場所へと移動していた。伏撃予定地点はこの付近でも道が細く、また山の形に沿って道が曲がりくねっている場所であり、周囲の状況を確認することとは難しい。奇襲にはもってこいの場所であつた。

第二歩兵隊は道の左右に細長く兵を配置していて、それは予定地点をぐるりと囲むような形になっている。すでに戦闘準備は万端に整えられており、あとは《青国》^{あおのくに}の軍勢が道を通るのを待つだけだつた。このところ《青国》は連日夜間行軍を続けている。

《緑国》^{みどりくに}の兵の総数は、第二歩兵隊の五百と後方から送られてきた援軍二百。つまり合計七百である。それに対してあちらの先鋒隊の総数はおよそ千五百。先鋒だけで倍以上の差があつた。《緑国》の兵は、これを伏兵の効果と土地の利だけを頼りになんとか戦わねばならない。ましてその先鋒隊の後ろには、三千以上の敵の本隊が控えているので短期戦が理想である。

すでに日は落ちていた。空に雲はなく、薄い月明かりだけが闇夜を照らしている。ジノたち第三小隊は、地面に伏せながら敵が来るのを待っていた。斥候の情報を信じるならば、間もなく、《青国》軍の先頭が見えてくるはずである。夜目の効く者を側に置いているので事の始まりを見逃すことはないだろうが、万全を期すに越したことはない。彼もまた敵の軍勢が来る方向をじつと見張っていた。

日が沈んでしまったことで、ずいぶんと気温は下がっていた。凍

えるとまではいかないが、震えるほどには肌寒い。そろそろ冬になるうという時期であるから、仕方のないことではあった。もちろん火を焚いたりしたならば、たちまち敵に発見されてしまうので、俺は静かに腕をこすって暖を取っている。兵たちも同様であった。

早く敵が来てくれないか、俺は一瞬だけそう思った。戦闘に入れば、嫌というほど汗をかくことは分かっている。そうなればこの寒さで震えることもなくなるだろう。まあ、実際は別な理由で震えることになるだろうから、本来ならば今の状態のほうがずっとマシなのだが。

俺は余計な考えを頭から振り払うと、今度は手をこすり合わせながら隊長に指示された作戦を反芻することにした。もう何度も頭の中でその作業を繰り返し返しているが、もう一度最初から流れを追い始める。

敵の先鋒隊が規定の位置まで達したら、本隊の太鼓を合図に第二歩兵隊全軍で弓を斉射。その後、一気に襲い掛かる。第三小隊はちようど敵の真正面にぶつかるような位置にいた。おそらく抵抗は他よりも激しいだろう。とはいえ、何とかやるしかない。敵が混乱しているうちにどれだけ叩くことが出来るかが最初の勝負であった。

そして、可能な限り敵に痛撃を与えた後、また本隊の太鼓を合図に離脱。太鼓が叩かれなない場合は、二時間を目処に、つまり敵の本隊が出張ってこないうちに下がるようにとの話である。

急に決められた作戦であるので、あまり複雑なことはできない。また自分の指揮にもまだ不安があることから、押すと引くだけで話が進むのはありがたいことだった。

今のところ、兵は自分の指揮に従っている。擬装もきっちり行なっているし、日頃から音を立てないよう言っていることもあって、おそらく敵に発見されることもないだろう。俺はなるべく安心できるように材料を探して、自分の不安を紛らわせていた。

「副隊長殿」

近くにいる兵が小さい声で俺を呼んだ。俺は声を出さずに、ずりずりと地に伏せたままその兵のそばに寄っていく。

「見えますか？」

その兵は道の先の方を指さした。その方向に向かって目を細めると、遠くにかすかに動いているものが見える。

「ああ、見えた」

「おそらく、先鋒隊です」

俺は頷き、そのまま見張っているようにその兵に言い置いて、後ろに下がった。控えていたマキシムを呼ぶ。

「敵軍の先頭が見えた。他の隊も気付いているはずだ。半時間以内には突撃に移る。兵に弓を準備をさせておいてくれ」
「わかりました」

マキシムは命令を復唱すると、すぐに兵に準備させるためその場を離れた。さて、どうなるか。俺は無意識にまた腕をこすっていた。

このところ、本隊からの命令で連日のように夜間行軍は続いていた。兵からも少しずつ不満が出始めている。そろそろ休憩を取らせるべき頃合いだと思うのだが、どうやら本国から《緑国》の攻略を急ぐようにと、本隊に命令が来ているようだった。

聞いた話によると、《赤国》あかのくにが不穏な動きを見せているらしい。《緑国》が周辺国に救援を頼んだのかもしれない。おそらく《赤国》がちよっかいを出してくる前に勝負を付けろということなのだろう。

とりあえず、あと数日で新しい集落にたどり着く。そこではいくらか休息も許されるだろうから、それまで兵に我慢してもらっていない。馬の上でそのようなことを考えていると、同じく馬に乗って後ろに控えていた副官から声をかけられた。

「メール様」

振り向くと、副官は馬をこちらに寄せてきた。

「どうした」

「このあたりは情報よりも道が細く、またひどく曲がりくねっています。もしものことを考えて、一度隊列を見直すべきではありませんか？」

どうやら副官は伏兵の危険を説いているようだった。

「もっと小さくまとめるべきだろうか。しかしそうになると、一度行軍を止めなければならないな」

「念のためです。ここ数日はほとんど抵抗らしい抵抗もありませんが、最悪、兵に被害を出すよりはいいかと」

少し悩んだが、確かに副官の言うことには一理あった。いくら急いでいるとはいえ、兵に余計な被害をだすわけにはいかない。

「わかった。第六歩兵隊の隊長に伝令を出してくれ。第五歩兵隊は隊列を変更するため、少しの間行軍を止めると」

副官は頷き、近くにいた兵を呼んだ。すぐに情報はあちらに伝わるだろう。本当なら第五歩兵隊もこちらに合わせて停止してくれるといいのだが、あちらの隊長はかなり強い性格であるはずだから、まず待つてはくれない。それゆえ、こちらがなるべく早く隊列の変更を行うしかない。

いくらか速度を落としてくれるだけでもいいのだが。すぐにそれもありませんないなと思ひ直して、俺はため息をついた。

《青国》の軍勢はすではつきりとその姿が確認できる距離まで近づいていた。もう少しで決められた地点に到達する。第三小隊を含め、第二歩兵隊は太鼓の音が響き渡る瞬間を今か今かと待っていた。

兵は一人一人がそれぞれ手に弓を持っている。太鼓の音と同時に一斉に弓矢が放たれ、まずそれが敵軍を混乱させるはずであった。ちなみに《緑国》はその土地柄から狩りが盛んであったので、もと

もと弓を扱える兵は少なくない。

とはいえ、兵の数から言えばその効果の程はたかが知れているが、それでもいくらかは突撃の足しになるはずである。

「そろそろです」

すぐ側に控えているマキシムがつぶやくように言った。すでに兵への命令は終わっているの、俺は何も答えない。ただ弓を強く握りしめて、その瞬間を待った。

そして数瞬の後。静寂だった闇夜に太鼓の音が連続して響いた。

「構え！」

俺は太鼓の音にかき消されないよう、部隊の兵の方を向いて腹の底から叫んだ。すぐに兵は反応して、それぞれが弓を引き絞る。マキシムが全員を確認して、こちらに叫んだ。

「全員大丈夫です！」

「打てえ！」

俺の号令と同時に、一斉に弓矢が放たれた。

太鼓の音は鳴り続けていた。すぐに敵の様子を確かめたいところだが、なんとかそれを我慢して兵に再度弓を構えるよう大声をあげる。一瞬足りとも無駄にはできない。

すぐにまたマキシムが叫んだので、それに続くようにまた俺も叫んだ。斉射。周囲に伏せていたほかの隊の兵たちも同じように矢を

射掛けているようだ。敵軍からも声があがり始め、混乱した様子が伝わってくる。

もう一度。それが限界のようだった。俺は再度兵に矢を射掛けさせると、兵に弓を剣に持ち替えるよう叫ぶ。すぐにマキシムが同調して叫び、すぐに兵は命令を理解した。それぞれが弓をその場に捨てると、腰に挿していた抜き身の剣を引き抜き、構える。

俺は太鼓の音が止むのを待った。周囲の隊も弓を放つ手を止めている。そして最後にどんと大きな音がして太鼓の音が止まった。

一度大きく息を吸う。それから自分が出せる限りの大声で叫んだ。

「突撃い！」

その声をきつかけに第三小隊は一丸となって、敵軍の先頭へと突っ込んでいった。

三話（後書き）

後でかなり修正する予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3179y/>

ジノの彩国建国物語

2011年12月4日02時47分発行